

徳法寺

孤独と他者からの認識

杉谷 伊吹

こんにちは、ご機嫌如何でしょうか。令和四年もよろしくお願ひ致します。今回は「孤独」と「自分が他者から認識されている」という事象に関して考えてみます。令和三年に起きた惨い事件について私的に考察してみたものです。

「孤独」を好む人もいますが、私は「孤独」にとっても弱い人間で、そのような私の感性から捉えた考察であるという事をご了承ください。

まず、「孤独」についてです。意味としては「一人である」ということですが、一人で生活していても「孤独」ではない人もいれば、たくさんの人に囲まれていても「孤独」を感じている人もいます。どれだけ家族や仲間にも囲まれているようにも、私と同じ心理や感情、思考を持っている人は誰もいません。ですから、私を完全に理解してもらおうことなど不可能なのですが、理解することを求めてしまうのです。人間は本

質的に一人の個として独立した存在であることが「孤独」を感じてしまう根源的な問題であるとも言えます。

浄土真宗が根本経典とする『仏説無量寿経』の中に「独生独死独去独来」という言葉があります。「生まれたのが独りなら、死ぬのもまた独り、去って行くのも独りなら、やって来るのもまた独り」という意味で、人生は誰とも共有できないし、誰も代わってくれないことを説いています。

つまり「孤独」とは、だれ一人逃れようのない事実なのですが、これがどの様な環境で増幅され、悲惨な事件へと結びついていくのかを考えます。「孤独」に関する感度は人それぞれですが、ここでは「孤独」を二段階に分けて考えてみます。

まずは浅い段階の「孤独」ですが、他人と共存してはいるものの、周囲が自分の存在の認知に消極的・非肯定的だと受け止めている状態です。自分の存在が群れの中において容認されていないという疎外感からくる「孤独」です。

さらに深い段階の「孤独」は、他者から自分の存在が全く認識されていないと感じている状態です。「シュレディンガーの猫」という実験をご存じでしょうか？中身の見えない箱に猫を入れて、五割の確率で猫が死ぬ仕掛けを作動させます。すると、箱を開けて猫の生死を確認するまで、箱の中にいる猫は生きている状態と死んでいる状態が重なって、それぞれが五割

の状態であるという量子力学の話です。これは他者から観測されない限り物質は半分しか存在していない状態であるという理論で、今では様々な実験によって立証されています。自分の存在を誰も認識していないという感覚は、極限状態の「孤独」と言えます。フランスの哲学者デカルトは「我思う、故に我在り」という言葉を残しましたが、私が思っているだけでは存在しているとは言えないのです。

昨年の事件のいくつかは、犯人が自分の存在が誰からも認識されていないという「孤独」のなかで起こっていたようです。その苦しみは絶望的で、自分が生きていくことを実感することさえ難しいものであったと想像できます。ですから、自分が生きていたことの証明として死を確認して貰うために、他人を巻き込んだ大きな自殺事件を起こすという事に至るのではないのでしょうか。これは個人的な問題であると同時に、社会の問題でもあると思うのです。



十二ヶ滝 小松市

奥能登国際芸術祭2020+

杉谷 紬

昨年十月に第二回奥能登国際芸術祭2020+を巡った。本来2020年に開かれる予定であったのが新型コロナウイルス感染症拡大の影響で一年延期しての開催となった。私にとっては、2017年の第一回開催の際以来の四年ぶりの訪問である。

今回気付いたことの一つに、会場で受付や監視を行うサポートスタッフが、学生ボランティア中心から地域住民中心となっていたことがある。コロナ禍で珠洲市外からメンバーを集めるのが憚られたのかもしれない。しかしそもそもが、地域の風景や文化をアートにする芸術祭なのだ。地元スタッフの活躍ぶりは、より芸術祭のコンセプトに叶ったものとして好ましく感じた。彼らは訪れる人をまるで自宅への客のように暖かく迎え入れ、作品について我が子のように誇らし気に語ってくれた。「来場者対応」を越えた親しみやすい態度に、自然と話も弾んだ。

私は前回に続き今回も全作品を巡ることができた。中でも特に印象に残ったのは尾花賢一の《水平線のナミコ》である。海岸の巨大な倉庫に足を踏み入れると、まずは珠洲の民話「嫁礁（よめぐり）」を紹介する大パネルが目に入る。そこで珠洲沖には漁師と妻の悲しい物語にちなみ「嫁礁」と呼ばれる暗礁があることが示される。その先を進むと、「嫁礁」

の方言テキストが細切れに木のパネルで綴られていく中に、同じく木のパネルで一頁ずつの現代を舞台にした劇画が交じり、珠洲に帰郷する男性のストーリーが青春の回想と共に展開されてゆく。次第に戦時中を描いたと思しきパネルも交じり、複数の時間が重なり響き合う構成となっている。

この多層性はパネルと共に展開されるオブジェによつてさらに広がりを見せている。パネルで登場したモチーフが、パネルとパネルの間に立体となつて置かれる他、海を連想させるオブジェや、船にまつわる道具らしきものがさりげなく配されている。この生々しい立体物たちが虚構と現実、時間と空間の仲立ちをし、鑑賞者に目撃者として物語に参加することを強いてくる。

作品の最後までたどり着くと、かっと光が目飛び込み、海が広がる。薄暗い倉庫の海に面した扉が開かれ、そこが出口となっているのだ。開かれた扉の前に、波をモチーフにした女性のオブジェが立つ



《水平線のナミコ》(部分)

ている。その時、会場に入った時から絶えず静かに響いていた波の音こそが、作品をまとめあげる非常に重要な要素であったことに気づかされた。そしてその音が、実際に会場の外にある珠洲の海岸に打ち寄せている波の音であることに無性に感動した。

海岸まで降りていって作品を見たのだから、鑑賞中に波の音がするのは当然である。しかし、巨大な倉庫の中で作品世界に釣り込まれ、いつしかそれは意識下に追いやられていた。そして、作品の最後にたどり着いた時に改めて波の音を、作品と共に捉え直すことになる。寄せては返す波は悠久の時とその中で繰り返される人の営みを、何度も打ち寄せる響きは膨大な数の今は遙かな追憶を、波の音は深く広く重なり合った作品世界の確かな土台となり、普遍性を担保し、人々の小さな祈りを優しく包み込む。

二年、あるいは三年に一度、地域ぐるみの開催で様々な場所に作品を設置するという企画は、日本各地で徐々に増えてきている。単なる観光客誘致と捉えられることなく、その地域で交流の機会となったり、人々の記憶を可視化したりするものとして根付いていってほしい。奥能登国際芸術祭2020+は数多くの分断を生んだコロナ禍の中開催された。検温や消毒の徹底は勿論、リモートでの作品設営などもされたといい、開催するための苦労と手間は計り知れない。しかしこの困難な状況でこそ、なおさらに開催された意義があったと言えるのではないだろうか。第三回開催への期待を込めつつ、私も今、できることを模索してゆきたい。

環境からの声

杉谷 淨

下の写真は、京都にある詩仙堂です。元は江戸時代初期の文人石川丈山の山荘でしたが、現在は曹洞宗の丈山寺という寺院で、正確には凹凸窠（おうとつか）といえます。チャールズ皇太子と故ダイアナ妃も訪れており、風情のある建物からは美しい日本庭園を見ることが出来ます。雄大な自然は、私たちを振り回している人間社会の価値観が些細なものではないと気付かせてくれます。日本庭園は、日常空間の中にこの大自然を再現しています。ですから、眺めていると心が穏やかになるのです。

大乘仏教經典の多くは、お釈迦さまや弟子たちの物語となっています。そこには人物以外にも、鳥や木々、さらには風や水なども、さとりを知らしめるものとして登場しています。仏教では生き物の世界を衆生世間、生き物が住んでいる世界を器世間と呼んでいます。これは社会環境と自然環境という言葉に言い換えることができるかもしれません。自然環境は私たちを育んでくれている大切なものであると同時に、耳を澄まし目を凝らせば多くの事を教えてくれるものであると仏教は考えてきたのです。このため、お釈迦さまのころから、僧侶たちは町や村から少し離れた林や森に住み、人々を教化しながらも人間社会の欲に流されないように、自然環境からの声に包まれて生活してきました。

日本の僧侶もこれに倣い、山に籠ることを基本としてきましたが、一部の僧侶はあえて山を下りて人々と共に生活するようになります。奈良時代の行基や平安時代の空也などがそでうす。行基は生活困窮者の為の施設をつくり、灌漑や河川整備を行いました。空也は町中で行き倒れた人々の為に念仏を称え遺体を弔いました。

お釈迦様は、すべての人々が苦しみから解放されることを願って教えを説きました。町から少し距離を置いて生活したのも、教えが社会の価値観に振り回されないためです。ところがいつの間にか、人々を救うことよりもさとりを開くことの方が重要になってしまいました。行基や空也は、仏教がさとりを得るといふ大義の為に、人々の苦しみや悲しみの声を聞くことがおろそかになってしまっていることに疑問を感じたのです。

鎌倉時代に生まれた浄土宗と禅宗はこの問題に異なる取り組みをしました。禅宗は寺院内に石庭を作ることに、比叡山や高野山のように僧侶と社会を隔離することなく、町中で自然の声を聞きながら、人々の声にも耳を傾けるようにしました。

一方の浄土宗を開いた法然は、栄西やその弟子たちが武家や公家の援助で寺院を次々と建立していく中、苦しむ人々の中に身を沈めるために寺院という形態さえも嫌い、弟子たちにも寺院建立を禁じたのです。今でこそ法然門流の各宗派は寺院を持っていますが、山に籠るような修行はしていません。

もちろん、自然環境からの声を聞くことは大切なことです。現在、世界的問題となっている自然破壊



京都 詩仙堂

は、一刻の猶予もない状態です。しかし、かつての僧侶たちがそうであったように、壮大な自然環境に感化され過ぎてしまうと、人間社会を見下げてしまうことにもなりかねないのです。法然はそのような自分の弱さに気が付き、人間社会に目を向けるために、あえて自然から距離を取ったのでしよう。心を静めて自然環境からの声を聞きながら、社会環境からの声も大切にして、未来の子供たちにより良い未来を残しているように考えなければならぬという、先人たちが経験したことのないような難しい局面に、今私たちは直面しているのです。

徳法寺からののご案内

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺住職 杉谷淨

- 三月 鎌倉仏教 4 法然と浄土宗 1
- 四月 鎌倉仏教 5 法然と浄土宗 2
- 五月 鎌倉仏教 6 親鸞と浄土真宗

昨年の講座は鎌倉仏教の禅宗まで行いました。今年から浄土教の諸師に入ります。法然には多くの個人的な弟子がいらっしやっただので、二回に分ける予定です。

平安仏教の最澄・空海と天台・真言宗、鎌倉仏教の栄西・道元の臨済・曹洞宗の関係はかなり複雑なものでした。法然・親鸞と浄土・浄土真宗の関係も一筋縄ではいかないものがあります。宗祖とされる方々が大切にしていたものと、宗派という組織が大切にしたいものとの間には隔たりがあるためです。これは一概に宗派が悪いと言えるようなものでもありません。組織を維持するということは、それだけ難しいものであるということです。

今年もコロナ禍により先が見通せませんが、少しでも進めていきたいと思っています。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

若鬼士展 三州鬼師 技の最前線

三月十二日(土)～四月八日(金)

愛知県三河地方は全国有数の瓦生産地として知られ、鬼師(おにし)と呼ばれる鬼瓦を作る職人たちが活躍しています。当代きつての鬼師たちによる鬼瓦や瓦アートをまじかで見てみませんか。

春彼岸中日及永代経法要

三月二十一日(月・祝)

午後一時より 勤行『仏説観無量寿経』
 午後三時より 法話 当寺住職 杉谷淨
 若鬼士会 特別講演



表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>

令和四年

年忌法要のご案内

- 一周忌法要 令和三年死去
- 三回忌法要 令和二年死去
- 七回忌法要 平成二十八年死去
- 十三回忌法要 平成二十二年死去
- 十七回忌法要 平成十八年死去
- 二十五回忌法要 平成十年死去
- 三十三回忌法要 平成二年死去
- 五十回忌法要 昭和四十八年死去